書評

カビ図鑑－野外で探す微生物の不思議－

細矢剛・出川洋介・勝本謙／著　伊沢正名／写真

その道に疎いので，「カビ図鑑」と聞いてカビも図鑑になるのか程度に思ってページを繰って見た。間もなくあるページに目が吸い寄せられた。私が関心をもっている雑草のホトケノザの写真があった。それはときどき見る，葉が白い粉をまぶしたようなホトケノザである。ここは「第2章　カビを探そう」の中の「うどんこ病菌」のページで，白い粉は「ホトケノザうどんこ病菌」の胞子であるという。今まではっきりとは知らなかった。

「うどんこ病菌」にもいろいろな種類があるが，寄生する植物を枯らすことはないと説明されている。だからホトケノザも安全なのだろう。

改めて表紙のタイトルを見直すと，「野外で探す微生物の不思議」というサブタイトルがついている。ページを追うと，「サクラてんぐ巣病菌」「ツツジもち病菌」「モモ縮葉病菌」「クズ赤渋病菌」など，どこかで見たことのあるようなカビの写真が続々と並んでいる。「モチノキすす病菌」はモチノキにつくカイガラムシの排泄物を分解している腐生菌だとか。

そうだこの本はカビを主役にした野外観察の図鑑なんだ。肉眼，ルーペ，顕微鏡のレベルで写真が並び，生活史的な説明が平易になされている。これではカビのファンが増えそうだ。B5判なので持ち歩きには向かないが，観察のさいの話題が豊富になるだろう。

第3章は「実験・カビを捕まえよう」である。ここで何十年か前の記憶が蘇った。容器に池の水を入れ，細く裂いたスルメを使ってミズカビを釣るという実験である。ミズカビを研究していたＩ教授の講義を聴いて，やったことがあった。もちろんこの本にはその他のカビの釣り方もいろいろ出ていて，すぐにもやってみたいと誘惑する。

糞生菌というのがある。動物の糞から発生するカビも面白いという。ところが著者によるとペットフードで養われているイヌやネコの糞ではカビが期待できないそうだ。なるほど。ずっと以前，Ｉ教授からもらった年賀状に「ことしゃ巳の年，蛇の年，蛇の糞のカビ探そかな」とあったのを思い出した。

第４章のあとに「まとめ・菌類への深い理解をめざして」がある。その終わりの方の一節を引用しよう。「あらゆる生物がそうであるように，菌類も与えられた環境の中で懸命に生きようとしています。悪者か善者かというのは，人間の側から見た価値判断です。様々な生物が共生する自然という大きな枠の中で，その姿を正しくとらえることが菌類理解の第一歩です。」

ここに著者の菌類観，自然観が現れている。菌類を雑草に置き換えると，日ごろ自分で考えていることと同じだなと感じた。これもこの本をお薦めする理由の一つかもしれない。

（岩瀬徹）

B5判，160ページ，定価2,625円(税込)。
発行：全国農村教育協会(TEL 03-3839-9160, FAX03-3833-1665, hon@zennokyo.co.jp)。